

## 本と‘魔術’

一般教科 長谷部一気

先日、善通寺の近くの店でうどんを食べていると、後ろの客が、うどんは空海が中国からもたらしたモノなのだ、と言っているのを聞いた。空海が、「このうどん、‘食うかい’？」というチャレとともに紹介したかどうかは知らないが、渇水に喘ぐこの地に、少量の雨量でも育てられる食べ物を紹介したという話は、実際に庶民の生活に役立つ仕事もした空海らしい話だと思った。

ところで、この空海であるが、何故、中国（以下、唐と呼ぶ）に行ったかという、密教を勉強しに行ったらしい。一口に、「唐に勉強しに行く」といっても、当時は命がけの話である。実際、空海らの他に唐に行こうとした、船4隻のうち、2隻は沈んでしまったらしい。何故、そこまでして、密教を勉強したいのか？ 実は、空海の前にも同じようなことをした有名な人がいる。それは、三蔵法師である。この人も、本当の仏教の教えを求めて、天竺（今のインド）に国禁を侵して出発してしまった。当時、国を許可なく出て行くことは死罪である。そこまでして、三蔵は、天竺にあるという、‘本’つまり経典を求めて旅立ったのである。彼らに共通するのは、命の危険を冒してでも知りたい、という強烈な知識欲である。これを知らないからには、いても立ってもいられないという思いがあったのだろう。それを、満たしてくれるのは、‘本’であったのだ。例えば、誰でもこれからの自分の将来が書かれている本があったら、絶対見てみたいと思うだろう。特に、経典というのは、この世界の真理が書かれている（ということになっている）から、これは自分自身の運命だけでなく、全世界の秘密を知ることができる、とんでもない‘魔術’の本であったのだ。それは、誰でも読みたくなる！

個人的には、本というのは、この‘魔術性’が多ければ多いほど、読むに値すると思っている。つまり、‘魔術’とは秘密を解き明かしてくれる、または新たな世界の見方を教えてくれるものであり、それが無い本だと読んでいて興奮しないものだ。ちなみに、私が受け持っている物理や化学などは、もともとは占星術や錬金術といった怪しげなモノから生まれてきたものであり、実は現代の教科書に書いてあることなどは、中世に帰ったとしたら、とんでもない代物である。原子の構造や、宇宙の仕組みまで、恐ろしい内容が書かれている魔法の書物である。秘中の秘として、一般の人には絶対に見せられない本であったはずである。学生がこのことに気づいているとは思えないが、実際はそういうことなのである。

現代科学というのは、お呪いや、占いといった、いわゆる迷信の類とは逆であり、それとは相容れないものである。しかし、その教科書に書かれていることは、紛れもない科学的検証で生き残って来た‘真実の魔術’である。こんな、この世界の秘密が満載の本を学ぶのに、退屈などしていただろうか。本来、学問とは成績などのためにするものでなく、空海や三蔵がそうであったように、やむにやまれぬ思いからするものである。

現代は、命の危険を冒さなくても、そんな知識に飢えた若者を満たしてくれるものが、

実は身近にある。お気づきであろうが、それは‘魔術館’である。(図書館ともいう。) 身近すぎて余り感じないかも知れないが、実は、図書館は凄いところなのだ。